

208 肝疾患におけるCTスキャンとRIスキャンの比較検討

東京都養育院付属病院 核放部

野口雅裕、飯尾正宏、川口新一郎、大竹英二、
戸張千年、村田 啓、千葉一夫、山田英夫

腹部疾患診断におけるCT、US、RI等の各種非侵襲的検査の診断の有用性の評価はまだ必ずしも一定ではない。今回、特に肝疾患におけるCTスキャンと肝スキャンの有用性について若干の考察を試みた。当院で昭和53年1月より54年6月までに施行した上腹部CTスキャンは延件数168回であり、この内RIスキャンも合せ施行したものの130回であるが、今回は両スキャンの施行間隔が1カ月以内の77例について、その解析を試み、またこの内部検例10例についても検討した。スキャン施行日に関しては、肝スキャンが先行したものの63例(81.8%)、CTスキャンが先行したものの12例(15.6%)、同日施行のもの2例(2.6%)であった。77例の疾患別内訳は、胃痛の肝転移疑い9例、肝硬変・胆石症各7例、肝のう腫6例、原発性肝癌・肝腫大各5例などであった。肝スキャンは、Tc-99m フィチン酸2mCi静注後ガマカメラで正面・背面・左右側面像の4方向を撮影した。上腹部CTスキャンはGECT/Tを用いて、1cm間隔で5mmの幅で撮影した。造影剤併用法は肝内のSOLが疑われたものに限り施行した。両スキャンでSOL⊕のものは19例(24.7%)、両スキャンでSOL⊖のもの23例(29.9%)とCTとRIで所見の一致をみたものが約55%であり、また所見の一致しないものはRI⊕・CT⊖が11例(14.3%)、RI⊖・CT⊕が3例(3.9%)とRIでSOL⊕、CTでSOL⊖の例の方が多かった。今回は、対象患者が高令者であり、開腹所見・腹部血管造影・腹腔鏡所見・肝生検等の施行により最終診断を得た症例が少なく、両検査の信頼性の判定が困難な例もあったが、剖検例10例の検討では、両検査ともSOL⊕の4例中4例に剖検所見陽性であった。CTスキャンでSOL⊖、肝スキャンでSOL⊕または⊕の3例中2例に剖検で病巣が確認され、両検査とも⊖の2例中2例に病巣は認められなかった。以上より肝スキャンの方が僅かに病変の存在診断ではまさっていた。しかしSOLの質的診断では、CTスキャンで肝のう腫・肝癌の鑑別が可能であり、また胆のう床部のSOL、胆のうの位置異常、閉塞性黄疸における肝内胆管拡張の診断に関してはCTスキャンがまさっていた。しかし肝硬変をはじめとする肝・脾・骨髄等のRI摂取による総合イメージより判定する疾患には、生理学的イメージの肝スキャンの方がまさっていた。

209 びまん性肝疾患における肝シンチグラムとCTとの比較検討

神大 放科

大西隆二、末松 徹、一柳明弘、牛尾啓二
井上善夫、松尾淳昌

同 中放

西山章次、高橋龍児
兵庫県立西宮 内科
進士義剛

びまん性肝疾患診断に対しては肝シンチグラムの有用性が既に確立されているが、CTにおいては種々困難な点があり、有用性は未だ確立されていない。今回我々は各種びまん性肝疾患の診断へのCTの有用性を肝シンチグラムと対比しつつ検討した。方法は、CT画像より各種indexを設定し、その有用性の検討を行った。肝シンチグラムにおける脾腫、右葉萎縮、左葉腫大、骨髄像出現を参考にして、CT画像におけるindexを、肝および脾の最大横径、最大縦径、最大面積、容積をとり、有意性の検討をした。容積算出に関してはCT画像上の面積にslice間隔を乗じたもので、ファントムによる実験にりり近似を裏付けた。